

人文研究 大阪市立大学文学部紀要  
第48巻 第11分冊 1996年95頁～110頁

## ロレンスの魔女

高島 葉子

はじめに

ヨーロッパにキリスト教が広まるとともに、土着の異教の神々の多くは悪魔に転落させられ、排除されていった。「大いなるパン神は死せり」という言葉どおり、パン神も悪魔として追放された。ロレンス (Lawrence) は現代にパン神を蘇らせ、古代の異教世界に生きていた宇宙との連帯意識を回復することによって、現代文明社会の陥っている袋小路から脱出しようとした。パン神はロレンスの作品の中に、魔性的、神秘的な人物として繰り返し現れる。J.B. ヴィカリイ (J.B. Vickery) の言葉を借りれば「異人 (the stranger)」、<sup>1</sup> K. ウィドマー (K. Widmer) 流に言えば「魔性的恋人 (the demon lover)」<sup>2</sup> である。具体的には、最も代表的なものとして森番、そのほか農夫、炭坑夫、あるいはジプシーや放浪者などのいわゆる周縁的人物として登場する。また、動物や蛇さらには亡霊という異形の姿を取ることもある。こうした様々な姿をしたパン神は、主人公 (多くの場合女性) を魔性的力で魅了して不毛な生活から救い出したり、価値観の逆転を引き起こして異教的世界に目を開かせたりする。

キリスト教によって排斥されたのはパン神だけではない。異教の神々のなかには魔女に貶められたものがある。ミシュレ (Michelet) らのロマン主義者やフレーザー (Frazer)、マレー (Murray) らの人類学者は、世紀末の自然への回帰と女性原理の回復という思潮の中で、魔女の異教性を打ち出した。太母神ディアナ信仰などの豊饒神信仰がヨーロッパの民間信仰である魔女崇拜の根源であるという説を出したのである。キリスト教にとってこうした女神信仰は異端信仰として排斥すべきものでしかなかった。ディアナは「魔女の女王」にしたあげられ、民衆の魔女信仰はもともとは豊饒神信仰と同様善悪のバランスのとれた信仰であったが、歪められて悪魔の信仰に貶められた。<sup>3</sup> こうした異教の女神信仰に由来するとされる「魔女」にたいして、や

はり女性原理回復の潮流に乗って現れたロレンスはどのような立場をとったのか。パン神のように、現代文明に対立する異教文明の原理として蘇らせているのだろうか。答えは「否」である。ロレンスの「魔女」にたいする立場は「パン神」にたいするそれとは異っている。本論ではこの点に関して論述する。ロレンスの女性観とも関連することになる。

### 人喰い魔女

ロレンスの作品群には、「魔女」(witch)に喩えられる女性達がいる。「狐」("The Fox")のバンフォード(Banford)や「愛らしい女」("The Lovely Lady")のポーリン(Pauline)がその例として挙げられる。バンフォードは、「奇妙な、ちっぽけな魔女のようだ」("like a queer little witch")<sup>4</sup>, ポーリンは「老魔女のように」("like an old witch")<sup>5</sup>と、それぞれ「魔女」という語を用いて形容されている。これは単なる比喩ではなく、彼女らには伝承における「魔女」の属性がいくつか認められる。確かにバンフォードを「魔女」と見ているのは彼女を憎んでいるヘンリー(Henry)なのだから、「魔女」というのは、ヘンリーの彼女にたいする憎悪の表現ではあっても彼女の性質ではない、という見方も可能である。ポーリンの場合も同様に、「魔女」は姪のセシリア(Cecilia)の憎悪の表現であると言うこともできる。しかし、彼女らの性質には、「魔女」とされてきた女性の属性と共通するところがある。

ヨーロッパの昔話に登場する魔女の典型は、痩せこけた老婆であるが、この二人の魔女もこれに当てはまる。バンフォードは実際には三十歳未満であるにもかかわらず、痩せてすでに白髪が混じり、老婆のような印象を与える。例えば、

In her thin, frail hair were already many threads of grey, though she was not yet thirty.<sup>6</sup>

あるいは、

She was a thin, frail little thing, and her hair, which was delicate and thin, was bobbed, so it hung softly by her worn face in its faded brown and grey.<sup>7</sup>

と、書かれている。また、ヘンリーの眼に、マーチ (March) の胸は「柔らかくて白い」(“soft white”) のにたいして、バンフォードの胸は「小さくて鉄できています」(“little iron”) と映る。<sup>8</sup> 一方、ポーリンは実際に七十二歳という老齢である。彼女は、息子をいつまでも魅了し支配するために若さと美しさを「意志力」で保ち続け、薄暗がりでは三十歳と見紛うほどである。しかし、長男の死の秘密を知った姪のセシリアに亡霊の声を装って非難されると、罪の意識に苛まれ、ついに「老魔女」の醜い正体を現す。客間にちょうど足を踏み入れたとき、姪の点けた電灯の明かりで照らし出されたポーリンの姿は、やつれた、皺だらけの老魔女のようであった。

She blinked irritably, as if long years of suppressed exasperation and dislike of her fellow-men had suddenly floated to the surface of her, and crumpled her like an old witch.<sup>9</sup>

姿が魔女に似ているばかりではない。彼女らの辿る運命も魔女を連想させる。昔話に登場する魔女の多くが退治されるように、どちらも最後は死に至る。バンフォードはマーチの婚約者ヘンリーに殺され、ポーリンは、息子ロバート (Robert) との結婚を望む姪セシリアによって自殺へと追い込まれる。しばしば指摘されるように、どちらの作品も「眠り姫」のボタンを下敷きにした構造を持っていると言える。魔女の魔法によって「生きながらの死」ともいうべきで不毛な生活に陥っている犠牲者を、若々しい生命力を持った恋人が魔女を退治して救い出す、という筋書きになっているのである。前者は、ハイミス同士の同性愛の不毛から、後者は、息子を支配する母親の愛からの救済である。

このように「魔女」に喩えられ、「魔女」を連想させる外貌を付与され、「魔女」のように退治される、この二人の女性は、ロレンス文学における否定的人物として理解されている。上述のような不毛な人間関係を他人に強いことは、ロレンスの価値観においては「悪」とされるからである。興味深いことに、ロレンスにおけるこの「悪」は「魔女」のそれと一致する。魔女は「人喰い」であると考えられていた。魔女が人肉、特に胎児や赤子の肉をむさぼり喰うという話は、古くから民間信仰として存在した。15世紀から17世紀にかけて魔女裁判が広く行われた時代では、サバトにおいて魔女が子供を生贄として悪魔に捧げ、その血肉を分け合って食べた、と信じられてい

た。<sup>10</sup> ロレンスの作品のこの二人の女性も人間関係において「人喰い」である。二人はいわば「精神的な人喰い」なのである。

既書いたように、ポーリンは息子を愛によって支配する母親である。子供に愛を強いて束縛し、自立を阻む彼女のような母親は、ウィドマーがいうように、“cannibalistic mother”であり、その愛は“matriarch’s emotional cannibalism”<sup>11</sup>である。ポーリンは息子のロバートを、偽りの若さと美しさで魅了し、支配している。ロバートはすでに三十二歳だが独身、一種の性的不能に陥っている。収入も年間百ポンドほどで、経済的にも母親から独立できず、社会的不能者でもある。このようなロバートは、従妹のセシリアの眼に「彼の意志は生まれて以来ずっと母親の意志に屈服し、ひれ伏している、ほとんど身売りしているに等しかった。……見かけだけは男だが、中身は今までずっと男であったためしがない」(“His will was prostrate, prostrated since he was born, almost prostituted to his mother’s will. . . . A mere shell of a man who had never even been a man”)<sup>12</sup>と映る。さらには、「彼は本当の意味で生きてはいなかった」(“He never really lived”)<sup>13</sup>とさえセシリアは思う。ロバートは実は次男であって死んだ長男(Henry)がいた。この長男を母親のポーリンは事実上死に追い込んだ。ヘンリーは女優と婚約したことで母親に誘りを受け、婚約者と母親の間で悩み苦しんだ挙げ句、おそらく心労のため衰弱し、病気で急逝したのであった。このように、子供の自立を阻み、果ては精神的な死に追いやる、さらには肉体的死にさえ追いつめる母親は、ユング派の心理学によれば、太母(グレート・マザー)の否定的側面の表れである。ユングの言葉では「呑み込む太母」、ノイマンの言葉では「恐ろしい母」に当たる。この母性の否定的側面は、「支配する母」としてロレンス文学の主要テーマのひとつであり、初期の作品から繰り返し現れる。『息子と恋人』(Sons and Lovers)のモレル夫人(Mrs. Morel)もこの否定的母親像の代表的な例である。『無意識の幻想』(Fantasia of the Unconscious)の中に、このような母親について次のような強い調子の言及がある。

. . . [the] detestable *love-will* of the mother. Always the *will*, the will, the love-will, the ideal will, directed from the ideal mind. Always this stone, this scorpion of maternal nourishment. Always this infernal self-conscious Madonna starving our living guts and

bullying us to death with her love.<sup>14</sup>

これはまさに、息子を死に追いやった「人喰い魔女」ポーリンを連想させる母親像である。そして同時に、子供の内蔵をむさぼり喰う魔女の姿と重なる。

「狐」のバンフォードも、やはり「人喰い魔女」である。バンフォードとマーチは同性愛の関係にあることは既にも書いた。マーチが男性の役を、バンフォードは女性の役を担っている。しかし二人の力関係から見れば、これは一種の母子関係とも言える。すなわちバンフォードは子供のマーチを支配する母である。バンフォードは、ポーリンが息子の自立を阻むように、マーチの自立を妨げている。<sup>15</sup> 異性と結婚して一人前の女性になるのを許さない。ヘンリーがマーチとの結婚の意志表示をすると、バンフォードは激しくヒステリックに反対する。最初はヘンリーを歓待し、姉のように優しい気遣いを示していたが、彼が自分の愛情の対象であるマーチを奪おうとしているのを知ると、態度を一変させ、罵り、敵意を露にする。マーチにたいしては、泣いて自分のもとに止まらせようとさえする。マーチは心の底ではそんなバンフォードの独占欲を恐れ、彼女から逃れたい、ヘンリーに救い出してほしいと願っている。

She felt afraid of Jill [Banford]. In her dim, tender state, it was agony to have to go with Jill and sleep with her. She wanted the boy to save her.<sup>16</sup>

しかし、実際には、ヘンリーによるバンフォード殺害という形でしか、マーチはバンフォードから逃れることができない。

このように愛情の対象を捉えたまま放そうとしない独占欲の強いバンフォードに、ルーダーマン (Ruderman) は「呑み込む母」(the devouring mother) のイメージを認め、「本質的にバンフォードは太母 (マグナ・メイト=グレート・マザー) の危険な側面の表れである」と述べている。<sup>17</sup> これは妥当な見解である。「呑み込む母」という言葉をロレンスは妻フリーダにたいして使っており、必ずしも実際の母子関係に関してのみ使われるわけではない。人間関係、つまり夫婦関係を含め、あらゆる種類の愛情関係において、愛情の対象である人間の自立性、他者性を認めない破壊的性質を表す言葉である。しかし特に女性に顕著な性質ではある。次に引用するのは、ロ

レンスがマンスフィールド (Mansfield) に当てた1918年12月5日付けの書簡である。この中で彼は妻を夫婦関係において「呑み込む母」(the devouring mother)と呼んでいる。

First, I send you the Jung book, borrowed from Kot. [Samuel Solomonovich Koteliansky] in the midst of his reading it. Ask Jack [John Middleton Murry] not to keep it long, will you, as I feel I ought to send it back. -Beware of it- this Mother-incest idea can become an obsession. But it seems to me there is this much truth in it: that at certain periods the man has a desire and a tendency to return unto the woman, make her his goal and end, find his justification in her. In this way he casts himself as it were into her womb, and she, the Magna Mater, receives him with gratification. This is a kind of incest. It seems to me it is what Jack does to you, and what repels and fascinates you. I have done it, and now struggle all my might to get out. In a way, Frieda is the devouring mother. -It is awfully hard, once the sex relation has gone this way, to recover. If we don't recover, we die.<sup>18</sup>

ここにはユングのいう「呑み込む太母」としての女性にたいするロレンスの恐怖心が読み取れる。「太母」である女性は優しく男性を受けとめ、包み込んでくれる。しかし同時にまた男性を呑み込み、その存在を無にする恐ろしい存在でもある。男役のマーチが結局女役のパンフォードに支配され、新しい生活を望みながら最後まで自分の意志をはっきりと表明することができないのは、パンフォードもフリーダ同様ある意味で「呑み込む母」、つまり「喰らう母」だからである。彼女もまた精神的に「人喰い」なのである。

以上、ロレンスの作品において「魔女」と呼ばれる二人の女性が、「魔女」の属性に通じる性質を備えていることを示した。彼女らは外貌ばかりでなく、「人喰い」という、魔女に欠くことのできない、いわばスティグマである特質をも備えている。従って、ロレンスの作品において否定的女性の典型である「支配する母」すなわち「呑み込む母」に「魔女」という呼称が与えられているのは、この属性を意識して意図的になされていると考えられる。どうやらロレンスは否定的な女性像に「魔女」のイメージを見ていたようである。

ロレンスは現代文明人の生を活性化するために、キリスト教によって悪魔として排斥された「パン神」を復権させた。しかし、「魔女」の復権はないのか。この点について他の作品の女性の描き方も調べてみる必要がある。ここではロレンスの主要作品であると『恋する女達』(Women in Love)の女性登場人物の場合を見てみる。

### 『恋する女達』の魔女

まず、ロレンスのもっとも嫌悪するタイプである現代知的女性のハーマイオニ(Hermione)はどうであろうか。彼女もやはり恋人との関係において「呑み込む母」と言える。ハーマイオニは、恋人パーキン(Birkin)が自分から離れようとするのを許さない。彼女にも愛の対象を独占しようとする性向がある。彼の心をつなぎ止めようとするに彼女自身もはや疲れているにもかかわらず、彼を執拗に引き留めようとし、また引き留める力が自分にあると信じている。

He fought her off, he always fought her off. The more she strove to bring him to her, the more he battled her back. And they had been lovers now, for years. Oh, it was so wearying, so aching; she was so tired. But still she believed in herself. She knew he was trying to leave her. She knew he was trying to break away from her finally, to be free. But still she believed in her strength to keep him, she believed in her own higher knowledge.<sup>19</sup>

ハーマイオニのパーキンにたいするこの執着心は、息子の自立を許さないポーリン、マーチのヘンリーとの結婚にあくまで反対するパンフォードのそれに通じる。そしてパーキンの心をつなぎ止められないと解ったとき、それは殺意に変わる。未遂に終わるが、文鎮で彼の頭部を殴打する。

ポーリンとパンフォードは「魔女」に喩えられていた。ハーマイオニには「魔女」という言葉は使われていない。しかしそのかわりに「吸血鬼」のイメージが認められる。彼女のパーキンにたいする独占欲は「彼のすべてを知りたい」という欲望として表れるが、これは「吸血鬼」のイメージで描かれている。<sup>20</sup>

She was at once roused, she laid as it were violent hands on him, to extract his secrets from him. She *must* know. It was a dreadful tyranny, an obsession in her, to know all he knew.<sup>21</sup>

“extract”という語が「生き血を吸い取る」吸血鬼のイメージを喚起する。もっとも彼女が吸い取るのは「血」ではなく「知」である。この愛情の対象を「知りつくそう」とする欲望に取り付かれた人間は、『古典アメリカ文学研究』(Studies in Classic American Literature) のエドガー・アラン・ポー (Edger Allan Poe) の章において、その破壊性ゆえに「吸血鬼」に喩えられている。

It is easy to see why each man kills the thing he loves. To *know* a living thing is to kill it. You have to kill a thing to know it satisfactorily. For this reason, the desirous consciousness, the SPIRIT, is a vampire.<sup>22</sup>

あるいは、

The exquisitely sensitive Roger . . . gradually devouring her [Made-line], sucking her life like a vampire in his anguish of extreme love.<sup>23</sup>

という記述がある。ここでは吸血鬼は女性ではなく男性である。ロレンスにとって吸血鬼は男女を問わない。しかし彼はここでもやはり女性の場合はいっそう恐ろしいとしている。

Beware, oh woman, of the man who wants to *find out what you are*. And, oh men, beware a thousand times more of the woman who wants to *know* you or *get* you, what you are.<sup>24</sup>

興味深いことに、「人喰い」が「魔女」の属性であると同様に、実は「吸血」も「魔女」の属性のひとつである。上山安敏氏は『魔女とキリスト教』のなかで、南欧の魔女を代表するストリガについて「ストリガとは、夜に徘徊



徊する亡霊である。ストリガはフクロウの形をした、貪欲で憎々しい吸血鳥である」と書いている。<sup>26</sup> また、このストリガと混同されることが多い古典ギリシャ神話のラミア (Lamia) は中世において魔女の同義語となるが、このラミアはギリシャ神話では子供をさらって喰い、ローマ版の話では若い男の血をすすり、という。<sup>26</sup> 食人と吸血は結びついているのである。従って、ハーマイオニに使われている「吸血鬼」のイメージは「魔女」の属性を表すものである。

『恋する女達』には、いまひとりの否定的女性グドルーン (Gudrun) がいる。彼女には前述の女性達のような激しい独占欲や嫉妬心は見られない。むしろ冷淡な女性である。しかし恋人との力関係において上に立とうとするという点で、やはり「支配する」女性であることに変わりはない。そして彼女もハーマイオニと同様、恋人を知り尽くそうとする「吸血鬼」である。

Her fingers went over the mould of his face, over his features. How perfect and foreign he was—ah how dangerous! Her soul thrilled with complete knowledge. This was the glistening, forbidden apple, this face of a man. She kissed him, putting her fingers over his face, . . . to know him, to gather him in by touch. . . . She wanted to touch him and touch him and touch him, till she had him all in her hands, till she had strained him into her knowledge. Ah, if she could have the precious *knowledge* of him, she would be filled, and nothing could deprive her of this.<sup>27</sup>

しかも彼女の欲望は決して満たされることがない。

For always, except in her moments of excitement, she felt a want within herself, she was unsure. . . . when she compared herself with Ursula, already her soul was jealous, unsatisfied. She was not satisfied—she was never to be satisfied.<sup>28</sup>

しかし、やがて恋人のジェラルド (Gerald) が「腹を空かせて母親の乳房を求めて泣き叫ぶ赤ん坊」 (“a child that is famished crying for the breast”)<sup>29</sup> にすぎないと解ると、彼を軽蔑するようになり、彼を棄てる。そ

して新しい獲物を見出すように、レルケ (Loerke) に興味を抱き始める。

彼女のこうした吸血鬼さながらの冷酷な性質は、踏切の場面や「兎」の章での一種の動物虐待にたいする彼女の反応に暗示されている。踏切の場面では、アーシュラ (Ursula) とグドルーンの目の前で、ジェラルドが通過する機関車にひるむ雌馬を鞭で叩いて押し止まらせようとする。その時、馬の脇腹から血が流れる。その「血」を見てアーシュラが強い反発と嫌悪を露にするのと対照的に、グドルーンは一瞬顔色を変えはするものの、その心は冷たく、何も感じてはいない (“But she herself was cold and separate, she had no more feeling for them [Gerald and the mare]. She was quite hard and cold and indifferent”).<sup>30</sup> むしろ恍惚とさえしているようである (“The world reeled and passed into nothingness for Gudrun”).<sup>31</sup> そしてジェラルドに向かって「得意なのでしょうね」と叫ぶ声は、「奇妙な金切り声、まるでカモメか魔女のような声」 (“in a strange, high voice, like a gull, or like a witch”)<sup>32</sup> である。ここで「魔女」 (a witch) という言葉とともに留意すべきは、「金切り声」と「カモメ」である。これは前述のストリガを連想させる。ここではカモメであってフクロウではないが、「金切り声をあげる」鳥に喩えられ、しかもそれが肉食であるのは暗示的である。N.コーン (N.Cohn) によれば、ローマ人の著作の中に「金切り声をあげながら夜中にとび回り、人間の血と肉を喰べて生きる」フクロウのような、ストリックス (=ストリガ) と呼ばれる生物についての言及がしばしばあり、そして、このストリックス (=ストリガ) は「金切り声をあげる」を意味するギリシャ語の単語に由来する。<sup>33</sup> 馬の脇腹を流れる「血」による連想も働き、肉を喰らい、血をすする魔女のおぞましいイメージが喚起される。「兎」の章でもグドルーンの声は「かもめ」の鳴き声に喩えられている (“a high voice, like the crying of a seagull, strange and vindictive”).<sup>34</sup> そしてこの場面でも「血」が連想を誘う。暴れる兎が爪で彼女の腕を引っ掻き、つややかな白い肌に長い赤い裂傷が引かれる。肉を裂き、喰らい、血を吸う魔鳥の姿が浮かび上がる。

このように『恋する女達』に登場する二人の否定的女性にも、やはり「魔女」のイメージが認められた。いや、むしろ「魔女」のイメージで描かれていると言うべきである。従って、前節での推論どおり、ロレンスは人間関係において破壊性を持つ、「支配する」女性に「魔女」の姿を重ねて見ていたと考えられる。しかし、そのように結論するのは依然として性急である。な

ぜならアーシュラにも魔女のイメージが認められるからである。

アーシュラは一般にハーマイオニやグドルーンと対照をなす肯定的人物とされている。諍いや気持ちの行き違いがあるとはいえ、パーキンとの関係は最後には調和的狀態に至る。パーキンの理想とする、二人の人間の間の完全な均衡関係、星と星の均衡のような関係は、完全とは言えないまでもある程度達成される。しかしアーシュラもまた「吸血鬼」であり、「人喰い」である。パーキンにとってハーマイオニはある種の「支配する母」、「呑み込む母」であり、彼はその独占欲に苦しめられた。アーシュラもまたパーキンにとって必ずしも理想的な女性ではない。アーシュラにはハーマイオニにはない深い官能性があり、それが二人の関係を破綻から救うことになる。しかしやはり女性特有の独占欲、所有欲をアーシュラも持つ。彼女にとって恋人は「息子」なのである（“Ursula saw her men as sons”）。\* 彼女が求めているのは、パーキンとの「言葉では言い表せないような親密さ」であり、パーキンを完全に自分のものとして所有することである。

She wanted unspeakable intimacies. She wanted to have him, utterly, finally to have him as her own, oh, so unspeakably, in intimacy. To drink him down—ah, like a life-draught.\*

ここでは恋人の所有、支配が、「呑みほす」(drink down)という言葉で表現されている。これは「吸血」さらには「食人」を連想させる。アーシュラもまた、子供の血を呑みほす「吸血鬼」であり、肉を喰らう「魔女」である。

アーシュラのこのような性質を、パーキンはハーマイオニの場合と同様恐れ、そして嫌悪する。彼はハーマイオニの「精神的親密さ」と同様、アーシュラの「感情的、肉体的親密さ」も危険だと思う。そしてハーマイオニが「完璧な観念」(the perfect Idea)なら、アーシュラは「完全な子宮」(the perfect Womb)であり、どちらもすべての男性に服従を要求する恐ろしい存在だとする<sup>7)</sup>。ただし、ハーマイオニとは異なり、アーシュラは最終的にはこの破壊的な支配欲から解放されて、「愛でもなく情熱でもない」(“neither love nor passion”)\*<sup>8)</sup>安らかに満ち足りた境地に達し(“She had learned at last to be still and perfect”)\*<sup>9)</sup>、パーキンとの関係を安定したものにする。つまり、アーシュラの場合は最終的に肯定的女性像を獲得するものの、やはり「魔女」に喩えられるべき否定的側面も持ち合わせていたわけで

ある。従って、ロレンスは「支配する母」としての否定的女性像に「魔女」のイメージを見ていたと言える。

### 太母と魔女の原型

以上見てきたように、「支配する母」という、愛情の対象を支配しようとする女性、ロレンス文学における否定的人物のひとつの典型が「魔女」として描かれていることが確認された。この「支配する母」あるいは「呑み込む母」は、既に触れたように太母（グレート・マザー）の否定的な面に当たる。このことは、パーキンが、ハーマイオニとアーシュラに「太母」の否定的側面である「呑み込む母」の要素を見て、恐れ、嫌悪していることから明かである。

. . . it seemed to him, woman was always so horrible and clutching, she had such a lust for possession, a greed of self-importance in love. She wanted to have, to own, to control, to be dominant. Everything must be referred back to her, to Woman, the Great Mother of everything, out of whom proceeded everything and to whom everything must finally be rendered up.

It filled him with almost insane fury, this calm assumption of the Magna Mater, that all was hers, because she had borne it. Man was hers, because she had borne him.<sup>40</sup>

ユング派の心理学によれば、「太母」には産み育てる肯定的な面とすべてを呑み込み死に至らしめる否定的な面がある。そして古代の豊饒神信仰における太母神にもやはりこの二面性がある。例えば、ディアナ＝アルテミス神は、多産、出産、新生児の守護者であり、豊饒の神である一方で、彼女の怒りは恐ろしく、弓矢で子供を殺しさえする。魔術の女神ヘカテと同一視されていた。<sup>41</sup> しかしロレンスの場合は否定的な面だけが強調されている。パーキン（すなわちロレンス）にとって「太母」は崇拜や畏敬の対象ではなく、恐れと嫌悪の対象である。パーキンは、「月夜」(Moony)の章で、池に映った月影に石を投げつける場面で、次のように古代の太母神キュベレとアスタルテを罵る。

“Cybele—curse her! The accursed Syria Dea!— Does one begrudge it her?—What else is there?”<sup>42</sup>

ロレンスにおける「魔女」の原型は、パーキンの恐れ、嫌悪する、この「太母」の否定的側面のイメージと考えられる。

子を呑み込み、喰らう母という、「太母」の否定的側面が強調された女性像、これがロレンスの作品における「魔女」のイメージである。この「魔女」のイメージは、民間伝承としての魔女信仰における「魔女」というより、キリスト教会の作り上げた「魔女」のイメージに近い。本稿で取り上げた三作品に登場する魔女達を「魔女」と見なし得るその属性は、「人喰い」と「吸血」そして「子殺し」であった。これはキリスト教会が作り上げた「魔女」像に重なる。幼児殺しは魔女の残虐行為とされ、子供はサバトの祭りのご馳走であった。<sup>43</sup> 魔女達は赤子や幼児を殺してむさぼり喰うと信じられていたのである。魔女狩りによって産婆がしばしば魔女に仕立て上げられたが、その最も大きな要因は嬰兒殺しであった。<sup>44</sup> 民間伝承の「魔女」は前述したように、太母神と同様、善悪の両面を備えている。例えば、ドイツの民間伝承におけるホルダは恐怖とともに畏敬の対象であった。一方では優しい母のような存在であって、真冬の夜中に農場を見回ったり、耕作、収穫、糸紡ぎ、機織りなどを見守ってくれるとされていた。また勤勉さの褒美に子供達に贈り物をくれる。しかし他方では、恐ろしい存在にもなる。ワイルド・ハント（夜間に空や荒野を疾走する猟師と猟犬の亡霊）を率いていることもあれば、醜い老いた鬼婆に変身して悪戯な子供を懲らしめることもある。<sup>45</sup> 太母神にしても民間伝承の魔女にしても、両義的存在であって、もともと「悪」ではなかった。それがキリスト教の善悪二元論の体系のなかで否定面が強調され、「悪」となった。その際キリスト教会は、魔女のおぞましいイメージを作り上げるために、魔女の人喰い伝説を利用したのである。<sup>46</sup> 前述のホルダは、民間信仰において崇拜されたローマ起源のディアナ神と同一視されることもある。そしてこの女神は後にキリスト教会によって「魔女の女王」に仕立て上げられた。<sup>47</sup>

ロレンスの「魔女」も、キリスト教の魔女と同じで「悪」を体現している。「人喰い」はロレンスの場合「精神的人喰い」であるが、これが彼の倫理観において「悪」であるという点で、彼の批判するキリスト教と一致する。ディアナ信仰を含めて古代の異教では、広く人身供犠が行われていた。豊饒神は

いわば「喰らう神」なのである。エリアーデ (Eliade) が、人身供儀について、「聖の力」の再生を目的とする儀礼であると書いているように、<sup>48</sup> 異教世界において食人は再生につながる創造的行為であり「悪」ではない。また、フレイザーによれば、未開人は一般に人肉を食べることによって、肉体的性質のみならず、その人間の道徳的そして知的資質まで獲得することができると思っていた、という。<sup>49</sup> この場合も、食人は共感呪術としての行為であって、悪徳とは考えられていない。しかし、キリスト教社会では、「人喰い」は最も恐ろしい罪となる。魔女はこの最も恐ろしい罪を犯す存在である。それゆえ、魔女裁判で告発されたのは、この食人の罪に問われた場合が最も多い。ロレンスの場合、「人喰い」は比喩であるが、「人喰い」の罪によって女性達を魔女として告発しているところは、キリスト教会と変わらない。

このような、ロレンスの魔女の扱いは、キリスト教によって同じように「悪魔」に貶められた「パン神」の場合とは明らかに異なっている。女性嫌悪という点では、ロレンスはキリスト教的と言わねばならない。異教に終生心惹かれながら、一説では異教起源とされる「魔女」に関して、キリスト教的態度を示しているのは興味深い。

#### 註

- 1) John B. Vickery, "Myth and Ritual in the Shorter Fiction of D.H. Lawrence," *Modern Fiction Studies*, Vol.V, No.1 (1959): 66.
- 2) Kingsley Widmer, *The Art of Perversity: D.H.Lawrence's Shorter Fictions* (Seattle: U of Washington P, 1962), 41-75.
- 3) 上山安敏『魔女とキリスト教』人文書院、1993年を参照。
- 4) D. H. Lawrence, "The Fox," *The Fox, the Captain's Doll, the Ladybird*, ed. Dieter Mehl (Cambridge: Cambridge UP, 1992), 55.
- 5) D. H. Lawrence, "The Lovely Lady," *The Woman Who Rode Away and Other Stories*, ed. Dieter Mehl and Christa Jansohn (Cambridge: Cambridge UP, 1995), 267.
- 6) Lawrence, "The Fox," *The Fox*, 30.
- 7) *ibid.*, 34.
- 8) *ibid.*, 48.
- 9) Lawrence, "The Lovely Lady," *The Woman Who Rode Away*, 267.
- 10) ジャックリーン・シンプソン『ヨーロッパの神話伝説』橋本楨矩訳、青土社、1992年、208-214頁。J. B. ラッセル『悪魔の系譜』大龍啓裕訳、青土社、1990年、260-261頁。

- 11) Widmer, *The Art of Perversity*, 95-96.
- 12) Lawrence, "The Lovely Lady," *The Woman Who Rode Away*, 250.
- 13) *ibid.*, 246.
- 14) D.H.Lawrence, *Fantasia of the Unconscious and Psychoanalysis and the Unconscious* (London: Heinemann, 1961), 140.
- 15) Judith Ruderman, *D.H.Lawrence and the Devouring Mother: The Search for a Patriarchal Ideal of Leadership* (Durham, N.C.: Duke UP, 1984), 50を参照。
- 16) Lawrence, "The Fox," *The Fox*, 56.
- 17) Ruderman, *D.H.Lawrence and the Devouring Mother*, 55.
- 18) James T.Boulton and Andrew Robertson (ed.), *The Letters of D.H. Lawrence*, Vol.3 (Cambridge: Cambridge UP, 1984), 301-2.
- 19) D.H.Lawrence, *The Women in Love*, ed. David Farmer, Lindeth Vasey and John Worthen (Cambridge: Cambridge UP, 1987), 17.
- 20) 『恋する女達』の登場人物に関して, James Twitchellはハーマイオニを含む女性登場人物を「吸血鬼」であるとみなし ["Lawrence's Lamias: Predatory Women in the *Rainbow* and *Women in Love*," *Studies in the Novel*, vol.11, No.1 (1979)], Sung Ryol Kim はさらにこの論を進めて, 女性ばかりか男性登場人物をも「吸血鬼」であると述べている ["The Vimpire Lust in D. H. Lawrence," *Studies in The Novel*, Vol.25, No.4 (1993) ]。『恋する女達』における吸血鬼のモチーフについては, 両氏の論文を参考にした。
- 21) *ibid.*, 89.
- 22) D.H.Lawrence, *Studies in Classic American Literature* (London: Heinemann, 1964), 66.
- 23) *ibid.*, 74.
- 24) *ibid.*, 66.
- 25) 上山安敏『魔女とキリスト教』, 72-73頁。
- 26) フレッド・ゲティングズ『悪魔の事典』大瀧啓裕訳, 青土社, 1992年, 422頁。
- 27) Lawrence, *Women in Love*, 331-32.
- 28) *ibid.*, 375-76.
- 29) *ibid.*, 466.
- 30) *ibid.*, 112.
- 31) *ibid.*
- 32) *ibid.*
- 33) ノーマン・コーン『魔女狩りの社会史—ヨーロッパの内なる悪霊』山本通訳, 岩波書店, 1983年, 280頁。
- 34) Lawrence, *Women in Love*, 241.
- 35) *ibid.*, 262.

- 36) *ibid.*, 264.
- 37) *ibid.*, 309.
- 38) *ibid.*, 313.
- 39) *ibid.*, 315.
- 40) *ibid.*, 200.
- 41) マイケル・グラント, ジョン・ヘイゼル『ギリシャ・ローマ神話事典』入江和生, 木宮直仁, 中道子, 西田実, 丹羽隆子訳, 大修館書店, 1988年, 91頁。
- 42) Lawrence, *Women in Love*, 246. この引用箇所についての注釈には, “Cybele is the Phrygian goddess of fruitfulness, worshipped as the Great Mother (*Magna Mater*) by the Romans . . . The ‘Syria Dea’ is Astarte . . .” と書かれている。( *ibid.*, 559)
- 43) ジャックリーン・シンブソン『ヨーロッパの神話伝説』, 212頁。
- 44) 上山安敏『魔女とヨーロッパ』, 220頁。
- 45) ノーマン・コーン『魔女の社会史』, 294-95頁, ジャックリーン・シンブソン『ヨーロッパの神話伝説』, 212頁を参照。
- 46) 上山安敏『魔女とキリスト教』, 79-80を参照。
- 47) 高橋義人『魔女とヨーロッパ』, 岩波書店, 1995年, 151-52頁を参照。
- 48) ミルチア・エリアーデ『大地・農耕・女性』堀一郎訳, 未来社, 1968年, 252頁。
- 49) James G. Frazer, *The Golden Bough: The Roots of Religion and Folklore* (New York: Avenel Books, 1981), Vol. 2, 85.